

教員になってから2校目の中学校では、若い方はわからないかもしれないが、まだワープロが主流の時代だった。私の愛機は、富士通オアシスだった。年に何時間も国語の授業を行っていたが、その中で、特にテーマを設けて取り組んだものに関しては、ファイルなどにそのときの資料が残っている。あるいは、何かの折に発表をしたり、原稿を書いたりしたものは、今でも残っている。

これらを見ていると、生徒の名前や写真が出てきて、懐かしくその頃のことが思い出される。生徒の発言をもとにした記録を読んでいて気がついたことがある。「なので」が出てこない。「なので」を使っていない。

ということは、いつの頃から「なので」を使うようになったのだろうか。今では、生徒だけでなく大人も使っている。教員の中にも使ってしまう方がいる。とはいえ、もうしばらくすれば、「なので」も認められるかもしれない。日本語は、誤用だったものが、いつの間にか認められ、正しくなるという特性をもっている。言葉は生き物である。どんどん変わっていく。

生徒の発言記録と私の記憶を頼りに、果たして、今の生徒と当時の生徒は、そんなに違うのだろうかと考察してみた。当時の生徒は、ちょうど今の中学生の保護者となっている世代である。思うように自分の考えを話すことができない生徒が多いことは昔も今もさほど変わらない。昔も思考力や表現力の育成を謳っていた。それは今も変わらない。

では、何が違うのか。昔は、性格的・気質的な要素から話せない生徒が多かったように思う。いわゆる日本人の弱点、課題である。今は、以前と比べれば、前向きに積極的にはなっているように思う。その分、トラブルも発生しやすいという側面はあるが、如何せん話すためのスキルが足りないのではなかろうか。語彙力も含めてのことである。

記録を見るとわかるが、昔の方が語彙は豊富だった。使っている言葉が今とは違う。読書の質も量も下がってきていることは否定できない。一つの事象をいくつもの言葉を使って、その差異を表してきた日本人の感性が失われつつある。

一つ例を挙げれば「ヤバイ」である。大抵のことが、この一語で済んでしまう。この言葉は、登場してから久しい。流行が終わり、そのうち死語となるような気配は今のところない。このまま残り続け、日本語として認められる日がくるかもしれない。

今の生徒は、さほど躊躇なく人前で発表しているが、昔の生徒は、人前で発表するとなると、それなりのエネルギーを必要としていた。それだけ今は、発表することなどに慣れてきたのだと思う。これはいいことである。プレゼンなどの言葉も普通に使われている。

その一方で、スキルが足りなくなれば、これは指導する側の問題である。発表などの場を設定するだけでは問題は解決しない。生徒に任せることは大切だが、力をつけられるようにアドバイスをしたり、指導したりする必要がある。生徒でも大人でも、もっとうまく話したいのである。もっと上手に発表したいのである。それをサポートするのは指導者の役目である。

昔の実践記録を見ながら、そんなことを考えた。生徒というのは、卒業して30年近く経っても、いまだに大事なことを教えてくれるのだからすごい存在である。